

Henry James, *The Spoils of Poynton*

— “The House Beautiful” をめぐる美しき戦い：

フリーダとジェイムズの再生 —

山口 志のぶ

序

The Spoils of Poynton は、1893年のクリスマスの前夜にジェイムズが知人から聞いた噂話が着想の源になって創作された。¹ その話とは、夫の死後、一人息子に継承されるべき立派な古い屋敷の見事な家具の所有権をめぐる母子の争いに関するものであった。この風聞は、ロンドンとその郊外を舞台に、美しき物を熱愛する未亡人がポイントン邸に飾られた至宝にも値する自身の蒐集品を守るため、それらの相続人となった鑑識眼のない一人息子と俗物であるその婚約者に戦いを挑み、主人公の *Fleda Vetch* は期せずしてその争いに巻き込まれるという物語に生まれ変わり、当初は“*The House Beautiful*”と題して創作が始められた。² *Atlantic Monthly* への連載(1896年4—10月号)が決まると、この作品は *The Old Things* と改題され、さらには単行本として刊行される1897年に現在の書名に落ち着いたのである。

このように、*The Spoils of Poynton* は一連の創作過程が詳細に記録された覚書が存在することもあり、これまでも数多くの研究者により格好の考察対象となってきた。その結果、作品の完成度に関して、中編という形式で書かれた傑作と評する Charles G. Hoffman と、内容の薄さに対して不釣り合いな長さを持つ典型的作品と指摘する Arthur Hobson Quinn とに代表される両極の評価がなされている。³ 特に、主人公 *Fleda Vetch* の解釈に関しては、批評家の間で様々な論議を巻き起こしている問題作である。フリーダを“*moral hysteria*”⁴と断じた Yvor Winters は、この主人公を不可解な人物と評する急先鋒の一人であろう。しかしながら、フリーダの心理的葛藤と行動について詳細に検証してみると、そうなるべき必然性が存在することは明らかである。また、F. O. Matthiessen や Kenneth B. Murdock あるいは Hoffman が指摘しているように、豊かな感受性と審美眼を持つこの娘が厳しい道徳観を持つがゆえに自身の幸福を諦める点は、ジェイムズの作品に登場する典型的な主人公に共通するものと考えられる。⁵

そこで本論では、この小説の原題である“*The House Beautiful*”に関連する執筆当時の社会背景に注目して、作品に織り込まれたシンボルやイメージリーを読み解きながらフリーダの人物像について論じ、この主人公が何と戦い何を得たかについて考察したい。さらに寓意的解釈を通して、この作品が作者にとっていかなる意味を持つのかという点についても論じたい。

1. “*The House Beautiful*”

ジェイムズが美術品とも言うべき家具の略奪戦に関する噂話に興味を示した背景には、19世紀後半の骨董蒐集熱に加えて、世紀末を席卷した審美主義の風潮や William Morris が先導する「アーツ・アンド・クラフト運動」などの社会現象がある。また、*The Spoils of*

Poyntonの原題が“The House Beautiful”であったことは、この時代の思潮に多大なる影響を与え、その中心的役割を果たした Walter Pater や Oscar Wilde と深く関係する。“The House Beautiful”という表現は、John Bunyan の *The Pilgrim's Progress* (1678) の中に描かれた「巡礼者の安息と安全のために建てられた家」を意味する“House Beautiful”に由来する。ペイターはこの表現をエッセイの中で幾度か使用しており、⁶ 1889年に刊行された *Appreciations: with an Essay on Style* の追記の中では、“... that House Beautiful, which the creative minds of all generations – the artists and those who have treated life in the sprit of art – are always building together, for the refreshment of human spirit”⁷と注釈し、歴史と芸術とを一体化させる概念として「美の家」を提示した。

芸術至上主義を提唱したペイターと芸術を人生との関連で考えたジェイムズとは概して共通点などないようにも思えるが、ペイターの代表作 *The Renaissance* (1873) にジェイムズが影響を受けていることはすでに指摘されており、ジェイムズが自身の小説観を論じた“The Art of Fiction”の中の有名な一行“Experience is an immense sensibility, a kind of huge spider-web of the finest silken threads suspended in the chamber of consciousness, and catching every air-borne particle in its tissue.”⁸の「蜘蛛の巣」のイメージは *The Renaissance* の“Winckelmann”の章からの借用であろうと Tony Tanner は述べている。⁹ ジェイムズの蔵書には *Appreciation* や *The Renaissance* を含むペイターの作品が10冊ほどあったことを考慮すれば、“The House Beautiful”という表現にジェイムズが無関心であったとは考えにくい。¹⁰

一方、“The House Beautiful”は過度に商業化された“aesthetic craze”の只中であって、芸術や信仰とは関係のない文字通りの意味で時好を表す言葉であった。南北戦争直後の共和主義精神の低下や贅沢に対する清教徒的な恐れ of 衰退、ならびに上流階級やブルジョワ階級の増加に伴い、19世紀後半のアメリカで「人に見せるための家」いわば「芸術品としての家」という意識が高揚をみせたのである。Ruskin や Morris を広く世に知らしめた Charles Eastlake の *Hints on Household Taste* (1867) は、1872年にアメリカで刊行されて以来 1888年までに10版を重ねる売れ行きを示し、設計士や雑誌ならびに Clarence Cook の *The House Beautiful* (1878) などの書物がこの社会的現象を煽った。¹¹ ジェイムズも 1869年、成人となって最初のヨーロッパ巡遊中に、イギリスにおいて室内装飾革命を巻き起こしたモリスの邸宅を訪れ、その感銘を3月10日付で妹の Alice に書き送っている。¹² このような社会事情から、ペイターの影響を受けたワイルドが 1882年にアメリカ講演旅行を行なった際には、すでにラスキンやモリスの思想に親しんでいた聴衆はこの審美主義者を熱狂的に迎えた。しかし、準備した演題 *The English Renaissance of Art* の原稿を読むワイルドには多少の幻滅を感じ、その内容についても期待したほどの知的刺激を受けなかったのである。¹³ この講演旅行でワイルドはこの他に四つの演題を加えたが、その一つに *The House Beautiful* がある。¹⁴ また、翌年に行われたイギリス講演においても

ワイルドは *The House Beautiful* という演題で壇上に上っている。¹⁵

このように“*The House Beautiful*”は *The Spoils of Poynton* が創作される当時の社会的風潮を端的に表す言葉であった。しかし、ジェイムズは原題であったこの表現を作品名とせず *The Old Things* へと改題した。この問題に関連して、この小説の源泉を Maupassant の作品に見出した Adeline R. Tintner は、第二の題名は“*Vieux Objects*”からの借用と推測している。¹⁶ モーパッサンが著したこの作品には、フリーダがグレス夫人の息子オーウェンから贈呈される予定となっていたマルタ十字と類似する象牙の十字架が登場するからである。また、物の美的価値に無関心な息子とその婚約者の手に蒐集品が渡ることを恐れた夫人が、ポイントン邸から自身の終の棲家であるリックス邸へと美しい品々を一夜のうちに移動させた出来事は、同作家がそれと類似した事件を描いている“*Qui sait?*”から着想を得たのであろうともティントナーは指摘している。¹⁷ そして、*The Old Things* から *The Spoils of Poynton* の改題の理由に関して David Lodge は、この小説を上流階級の骨董品蒐集熱と大量生産された安価な室内装飾品を消費するブルジョアの対決を描いた作品と書評し、読者が主題から教訓を得てほしいという気持ちを含めて、ジェイムズは略奪品と台無しになった物の二つ意味を持つ“*Spoils*”を題名にしたのだらうと述べている。¹⁸

しかし、この小説が物質的な美をめぐる戦いを背景に、美に対して相反する価値観を持つ母と息子との間に立ち情熱と精神的な美との相克に苦悩する主人公の心理的葛藤を描いた作品であることを考慮すれば、それに相応しい題名はむしろ原題の“*The House Beautiful*”のように思える。また、後の章で詳説するがフリーダには人気の低迷に苦悩する執筆当時のジェイムズ自身が色濃く投影されている。したがって、時代を象徴しペイターやワイルドが頻繁に使用した“*The House Beautiful*”を書名として自身の不遇に対する内的告白をあからさまにすることを嫌ったジェイムズが、この題名を避けたとも考えられる。その反面、“*The House Beautiful*”に相応しくこの作品は、*beauty* や *beautiful* ならびに *beautifully* 等の言葉で覆い尽くされており、それらは物質的に「美しい」という意味と、“*It's too beautiful, the way you [Fleda] care for him [Owen]*” (133)に例証される、倫理的あるいは道徳的に「立派な」「素晴らしい」という意味の二通りに使用されている。

2. *The beauty* : 美の使者フリーダの戦い

前述したとおりフリーダの解釈は様々であるが、その主な要因はこの主人公が愛する男からの求愛を執拗に拒絶するという、一見不可解とも思える行動にある。つまり、思いを寄せるオーウェンから求愛され、その母親からも息子との結婚を切望されているにもかかわらず、フリーダはオーウェンへの恋心をひた隠し断固として彼を拒むのである。この問題を解明するためには、*beauty* についてのフリーダの考え方を読み解き、美しき物の略奪戦をめぐるこの主人公の心理的葛藤に関して詳細に考察する必要がある。

そこで、フリーダと主たる登場人物の美に対する考え方の相違を検証する。まず、グレス夫人の場合、“‘Things’ were of course the sum of the world; only, for Mrs. Gereth, the sum of the world was rare French furniture and oriental china.”(24)という例説から明らかのように、この夫人は美しい品々に人間性を失うほどの価値を見出している。それとは逆に、審美眼のないオーウェンやブルジョアの娘のモナにとって夫人の蒐集品は、“the furniture” (43)あるいは“all right” (29)という言葉で表される程度のものである。一方、鋭い鑑識眼を見込まれ夫人の強い希望により“companion”(60)となったフリーダは審美こそはわが命なりと自負する気持ちこそ夫人と共有しているが、美についての考え方は彼女とは大きく異なる。確かに、初めてポイントン邸を訪問した際にフリーダは夫人の所有する蒐集品の素晴らしさに圧倒され賛嘆の涙を流した。だからこそ、それらに無関心な息子とその婚約者から至宝を守ろうとする夫人に同情を寄せたのである。しかし、夫人が不正な手段を使ってポイントン邸からリックス邸へと蒐集品を略奪してきたことを知ると、かつては感極まるほどの美を感じた蒐集品に対してフリーダは“ugliness”(78)さえも感じている。したがって、フリーダの美の観念には道徳的意味合いが含まれていていると考えられる。

この点から、美に道徳を求める *The Portrait of a Lady* (1881)の主人公 Isabel Archer の末裔にフリーダを据えた Edwin T. Bowden の指摘は妥当である。¹⁹ また、美術品の略奪戦とは別の次元でフリーダが道徳的な意味の beauty をめぐる戦いに挑んでいたことを考慮すれば、この娘は *The Golden Bowl* (1904)の Maggie Verver に通じる人物であるとも言える。マギーは夫と義理の母親 Charlotte との不道徳な関係に気づいて父親を守るためにシャーロットと戦ったが、フリーダの場合は審美への情熱で乱心したグレス夫人からオーウェンの“good nature” (107)や無垢を守ろうとしたのである。そのためには、モナとの婚約不履行の不名誉をオーウェンが負うことなど断じてあつてはならない。

第2章の終わりには、母親の依頼とはいえ突然押しかけた礼儀しらずの娘と誹られてもしかたのない自分に対して純粋な気持ちで優しく対応したオーウェンの素晴らしい性質に、フリーダが至高の美術品とは異なる“a beauty” (20)を発見する様子が描かれている。それに続く第3章でも、モナの策略について夫人がフリーダに意見を求める場面でジェイムズはこの主人公の意識を以下のように記している。

The future was dark to her, but there was a silken thread she could clutch in the gloom – she would never give Owen away. He might give himself – he even certainly would; but that was his own affair, and his blunders, his innocence, only added to the appeal he made to her. She would cover him, she would protect him, and beyond thinking her a cheerful inmate he would never guess her intention, any more than, beyond thinking her clever enough for anything, his astute mother would discover it. (28)

この叙述に示されているように、一連の騒動の始めから並々ならぬ決意でフリーダがオーウェンを守ろうとしていたことは明らかである。しかもその決意は、オーウェンの最終的な決断がフリーダの誠意に答えるものであるか否かは問わない、という無私の気持ちから生じている。物語の展開と共に様々な場面で、自身の取るべき道の選択を余儀なくされる彼女ではあるが、唯一この決意を変えることはない。そして、フリーダの一見不可解に思える行動をとる原因の一つが夫人に同情を寄せる“companion”(60)を演じながら夫人の敵である息子を守るという矛盾した使命を自らに課した点にあることも、この引用から導き出せる。これに関連して、ジェイムズは創作ノートの中で次のように述べている。

If I want *beauty* for her [Fleda] – beauty of action poetry of effect, I can only I think, find it just there; find it in making her heroic. To be heroic, to achieve beauty and poetry, she must conceal from him [Owen] what she feels.²⁰

この覚書の通り、フリーダはオーウェンを守ることに“heroism”(106)を感じ、マギーがそうであったように、この決意を誰にも知られずに遂行しようとしたことが彼女の行動を一層複雑なものにしているのである。

このようにフリーダの動機は *beauty* という言葉を鍵に解明することができる。しかし、それでもなおこの主人公の行動についての解釈が難解であるとすれば、それはジェイムズ自身が認めるように、フリーダが *The Ambassadors* のストレザーと同様に三流の仲介者に過ぎず、²¹ さらには視点人物でありながら騒動の中心人物でもあり、抜け目ないグレス夫人の気持ち洞察しながら、この夫人の作り出す状況に絶えず反応して行動しているからである。マギーやストレザーはフリーダと同様に視点人物ではあるが、この点については大いに異なる。マギーは人間関係において圧倒的な支配権を握っており、ストレザーは傍観者の立場で出来事を観察できた。

そこでフリーダの視点の信頼性が問われるわけだが、この問題に関して、ニューヨーク版に付したこの小説の序文の中でジェイムズは、“an interpretation and criticism”において主人公は優れた能力を持ち、ほとんど悪魔に憑かれたように見て感じる(“see and feel”)と述べている。²² また、この物語が所有欲に駆られた人間同士の単なる醜い争いを描いた作品とならぬようにジェイムズがフリーダに課した役割を検証すれば、この娘の視点が信頼に足りうるものであることは明らかである。第一に、ジェイムズは物語の冒頭で、モナの家族が住む邸宅の室内装飾を悪趣味だと誇る夫人に、この時点では何の利害関係も生じていない、鋭い鑑識眼を持つフリーダが同意する場面を描き、夫人の主観的な意見に客観性を与えている。また、ホフマンの指摘にあるように、ポイントン邸の豪華なたたずまいと見事な邸内についてのフリーダの賛美は、夫人の美意識の高さと鋭い鑑識眼に信頼性を与える役割を果たしており、²³ そのため、読者は劣悪な趣味の汚染から貴重な美術品を

守ろうとする夫人の動機に正当性を感じるのである。ジェームズが *The Ambassadors* でストレーザーの精神的成長を描いたと述べているのと同様に、²⁴ 序文の中でフリーダの成長と卓越に助力したと明言している点に注目すれば、²⁵ 読者のすべきことは、この主人公を信頼し、彼女が受けた試練と成長の過程を素直に見届けることである。

そこで注目すべきはフリーダの道徳的葛藤を巧みに表現している、彼女の行動と階段の昇降との関係である。例えば、リックス邸でモナと婚約中のオーウェンに言い寄られた際にフリーダは話をそらして彼を追い出し、そのあと階段を駆け上がっている。オーウェンと心が結ばれた後、モナがいまだに彼を解放していないことを知ったときも、フリーダは彼を拒んで階段を駆け上がっている。一方、不道徳なことだと知りながらも彼に対する甘美な思いに酔いしれる時、彼女は階段を降りている。このような階段の使い方は、数年後に創作される三大長編 — *The Wings of the Dove* (1902), *The Ambassadors* (1903), *The Golden Bowl* (1904) — に引き継がれることになる。また、オーウェンの愛を拒絶する場面でジェームズが、“the great Gardens”(66)の南西にある“the old red palace”(66)、つまり美德の権化たるヴィクトリア女王の生誕の地、ケンジントン宮殿の前にフリーダを立たせ、この娘の高い道徳性を強調している点も見逃せない。

それでは、このような主人公が美しき蒐集品の所有をめぐる戦いを通じて最終的に得たものは何であっただろうか。物質的に彼女が得たものは、物語の前半部で母親への親切に対するお礼としてオーウェンから贈られたピン刺しのみである。この若者が婚約不履行の罪を犯さぬように、恋心を自制したフリーダは結局のところ彼とは結ばれない。蒐集品なしでは結婚しないと憤慨するモナがその返却遅延に痺れを切らしオーウェンを断念すると予想したが、息子とフリーダの結婚を誤信したグレス夫人が蒐集品をポイントン邸に返却してしまったのである。その結果、オーウェンとモナは結婚してしまう。その後、オーウェンはフリーダの「立派な」働きに対してポイントン邸の財宝の一つ、マルタ十字の贈呈を申し出る。確かに、慈善事業に貢献した者に対して贈られるマルタ十字勲章は自己犠牲の道を選択したフリーダには相応しいと言える。しかし、実質的な幸福を断念したフリーダを暗示するかのようにそれは館の火事で焼失してしまうのである。この問題に関して、「フリーダの成功は自由にとどまったことのみにある」²⁶ とジェームズは序文の中で述べている。この点から、フリーダの名前の頭文字である“F”が縫い取られたピン刺しは、彼女の「自由」を象徴する褒章品ともなる。

そして、敗戦こそしたが精神的な葛藤から解放され成長したフリーダは自身の道徳的信念に従い新たな人生を切り開いていくのだらうと予想できる。最終章で、様々な苦難に耐えたであろう亡きリックス邸の家主の魂 (“the ghosts”(250)) が吹き込まれた本物の“beautiful things”(248)の素晴らしさをグレス夫人に説くフリーダの態度がその証である。また、ポイントン邸の焼失を知ったときのフリーダの様子が冷静であったことに注目すれば、彼女は自身の選択の結果に後悔はなく、これこそが彼女の生き方であることがわかる。

3. 敗戦とジェイムズの再生

最後に、自伝的事実を踏まえながら、*The Spoils of Poynton* の発表が作者にとってどのような意味を持つのか、という問題について考察してみたい。先に述べたように、この作品は、*The Old Things* と題して *Atlantic Monthly* の連載(1896年4—10月号)の後、1897年に刊行された。その前年にあたる1895年1月、ジェイムズは失意の底に沈んでいた。セント・ジェイムズ劇場で上演された自身の戯曲 *Guy Domville* が、観客から罵倒を浴びるほどの大失敗に終わったからである。この作品は、*The Portrait of a Lady* (1881) を頂点に下降の一途を辿る人気に苦悩していたジェイムズが、劇作に活路を見出して発表した起死回生の一手となるはずであった。当時のジェイムズの手紙を一読すると、彼の苦境が理解できる。例えば、兄の William に宛てた1890年1月23日付けの書面には、“I shall never make my fortune – nor anything like it [...]”²⁷ と綴られている。同様にウィリアム夫妻に宛てた1895年2月2日宛ての書状では、ロンドンの演劇好きの大衆は残酷で愚鈍な俗物であると述べ *Guy Domville* の失敗に対する無念の思いを表している。²⁸

事実、世紀末のイギリスでは、急速な工業化に伴う大衆社会の発生や社会変動によりヴィクトリア朝全盛期の倫理観や理性に対する人々の信頼性が崩れ、演劇においてもワイルドの作品に代表されるような軽妙でウィットに富んだ会話と演技が大衆の心を捉えていた。このようなジェイムズの事情を考慮して Leon Edel は、*The Spoils of Poynton* に劇作失敗のアレゴリーを見出し、ポイントン邸を焼き尽くす火は若かりしジェイムズの背中に傷を負わせた火であり、その火は観衆の罵倒となって再び作者を襲い、焼失するポイントン邸は *Guy Domville* であろう、と読み解いている。²⁹ しかし、これまで考察してきた “The House Beautiful” に関わる社会的背景と *The Spoils of Poynton* との関係やフリーダの経験を考慮すれば、エデルとは異なった解釈も可能である。

そこで、ジェイムズが実際にこの小説を創作した時期に注目したい。確かに着想を得た時期は先に述べたように1893年のことである。しかし、実際に物語を構築し始めたのは、おそらく1895年の5月13日であろう。その日の覚書の書き込みに、*the Atlantic* と3つの短編を書く約束をしたばかりだという記述とともに、この作品の原案が記されているからである。³⁰ ちょうどその頃、世間を騒然とさせていた事件と言えば、同性愛行為によるワイルドの投獄である。彼はこの年の4月6日に告発され、ジェイムズが書き込みを始めた5月13日頃は裁判中であり、その月の終わり頃までにはセント・ヴィル刑務所に拘禁されている。この事件について、ジェイムズは Edmund Gosse 宛て4月8日付けの手紙の中で以下のように感想を述べている。

Yes, too, [the affair] has been, it is, hideously, atrociously dramatic and really interesting – so far as one can say that of which the interest is qualified by such

sickening horribility. [. . .] But fall – from nearly twenty years of a really unique kind of “brilliant” conspicuity (wit, “art,” conversation – “one of our two or three dramatists, etc.”) to that sordid prison-cell and this gulf of obscenity over which the ghoulish public hangs and gloats [. . .] He was never in the smallest degree interesting to me – but this hideous human history has made him so – in a manner.³¹

この記述からも明らかなように、ジェイムズはワイルドの生き方に強い興味を示している。また、先に引用したウィリアム夫妻に宛て 1895 年 2 月 2 日付け書状の中でジェイムズは、*Guy Domville* の上演日に別の劇場でワイルドの *An Ideal Husband* (1895) が大成功を収めている様子を見て自身の戯曲の失敗を確信したと告白し、早々に打ち切られる *Guy Domville* に替わりこの成功者の作品が上演されるとも記している。³³ したがって、時代の寵児であったワイルドの凋落はジェイムズにとって不遇な時代が終焉する兆しとして感じられたとしても不思議はない。

このような背景から推測するとジェイムズは、芸術のための芸術を唱えた審美主義たちを美への狂気に憑かれたグレス夫人に重ね合わせ、俗物根性でしか芸術を捉えられない一般大衆の姿をモナに置換え、二者の間で頼りなげに戸惑う芸術の具現としてオーウェンを配したと解釈できる。その場合、オーウェンの名誉を守るため実質的な幸福を断念したフリーダはジェイムズ自身の投影であろう。つまりジェイムズは、世紀末の物質主義や大衆化ならびに退廃的風潮の中で、小説あるいは戯曲という芸術の名誉、いわゆる芸術の質を守るために精進し試練に耐えてきた己の姿を、*The Spoils of Poynton* を通して描いたのである。そして、オーウェンがモナと結婚するように、現実的にジェイムズは長きに渡り読者から見放されてきた。また、ジェイムズ自身の名前を連想させるジェイムズ 1 世風 (“Jacobean” (13)) のポイントン邸は、審美主義者であるグレス夫人の狂気によって汚されてしまった芸術、あるいはモナに代表される物質主義者、いわゆる俗物の手に落ち焼失してしまった *Guy Domville* を暗示すると解釈できる。一方、ジェイムズ 1 世とワイルドが共に同性愛者であったことに注目すれば、美の狂気に憑かれたグレス夫人の豪華な館が、つまりはワイルドの築き上げた世界が焼け落ちたとも考えられるのである。

これに関して、*The Spoils of Poynton* は *Balzac* の *Le Curé de Tours* をジェイムズ流に書き換えた作品であろうと推測しているティントナーは、美術品に強い愛着を持つバルザックの作品にはそれらの破壊場面は存在せず、時として芸術品は人間よりも価値あるものとして描かれる一方で、ジェイムズは *The Portrait of a Lady* から *The Golden Bowl* に至るまで人間らしい徳に勝る価値を芸術に見出すことを一貫して批判していると指摘している。³³ このようなジェイムズの道徳意識についてウィンターズは、道徳の根源に関するジェイムズ自身の解説がないことやその道徳観を理解することの難しさについて前置き

した上で、その本質はニューイングランドのものであろうと述べている。³⁴ 一方、“James himself did not have the heritage of American Puritanism. He spoke of his not being a New Englander ‘as a danger after all escaped.’”というマシーセンの指摘もある。³⁵ 確かに、ジェームズの生い立ちからこの問題に対する簡潔な答えを導き出すことは困難である。彼の父親はカルヴィン主義遵守の家庭に育ったがこの教育法に疑念を抱き、Ralph Waldo Emerson の哲学にも触れたがその限界を感じ、のちにスウェーデンボルグの学説を独特の解釈で取り入れた人物である。そして、子供たちに偏りのない物の見方と自己判断力を身につけさせるため、家庭教師を伴い長期に渡る欧州旅行を敢行し、様々な教会へも子供たちを連れ出している。

しかし、1867年にジェームズが Thomas Sergeant Perry 宛の書簡の中で、歴史と伝統のない国に生まれついたアメリカ人の特性は“our moral consciousness, our unprecedented spiritual lightness and vigour” (underlines mine)³⁶ の中に見出せると述べていることや、数多くの作品の中で洗練された文化を持つが道徳的腐敗がみられるヨーロッパと文化的には不毛だが道徳的廉潔さを持つアメリカとを対照的に描いていることを考慮すれば、ジェームズの道徳観はおそらくアメリカ的なものであろうと推測できる。ここで注意すべきは、*The Spoils of Poynton* が国際状況を扱った作品ではなく、ロンドンとその近郊を舞台としたイギリス人の物語であり、フリーダへのジェームズの投影は美の価値観について行われたという点である。したがって、本論においてジェームズの道徳の本質に関するこれ以上の言及は差し控える。

むしろ重要な問題は、作者と同様にこのイギリス娘が俗悪な趣味に賛同できぬ審美眼を持つ一方、人間性を欠いた美への情熱にも共感できなかったことにある。ジェームズは、1902年12月11日付け W. D. Howells 宛ての手紙の中で、自身の作品と劣悪な芸術との戦いについて、次のように述べている。

But we live in a lovely age for literature or for any art but the mere visual. Illustrations, loud simplification and *grossissements*, the big building (good for John), the “mounted” play, the prose that is careful to be in the tone of, and with the distinction of a newspaper or bill-poster advertisement – these, and these only, meseems, “stand a chance.” But why do I talk of such chances?³⁷

ここで使用されている“lovely”とは、ジェームズの苦々しい気持ちを込めた皮肉の意味で用いられていることは言うまでもない。しかし、ジェームズはこの試練に屈していたわけではない。*Guy Domville* の大失敗に関する失意の手紙を兄に書き送っている一方で、その挫折の直後、1月23日の創作ノートには以下のように記されている。

I take up my own old pen again – the pen of all my old unforgettable efforts and sacred struggles. To myself – today – I need say no more. Large and full and high future still opens.³⁸

この記述から、原点に立ち返り小説の創作に再度挑もうとするジェイムズの不退転の決意が読み取れる。そして *The Spoils of Poynton* を執筆する作者の姿は、敗戦こそしたが自身の道徳的選択に悔いることなく新たなる一步を踏み出したフリーダを彷彿させる。

結 び

ジェイムズの後期がどの時期から始まったかという問題に関して、明確に答えることは難しい。少なくとも、*The Wings of the Dove* (1902)の刊行に始まり矢継ぎ早に出版された *The Ambassadors* (1903)と *The Golden Bowl* (1904)で、ジェイムズが初期に扱った国際状況を再び取り上げ、見事な作品に仕上げたことを考慮すれば、この三大長編がジェイムズの後期の始まりを告げる記念碑であると考えられる。そして、本論で考察した *The Spoils of Poynton* (1897)には、やがてこれらの作品の中で開花する無数の蕾が内包されている。視点の技法や、作品に統一感を与え主題を鮮やかに照らし出すイメージャリーやシンボルは、後期の作品でまさにそのままの形で使用されている。また、主人公のフリーダは、美に対する価値観やその道徳的な生き方において、初期の傑作 *The Portrait of a Lady* (1881)のイザベルや *The Golden Bowl* のマギーに通じる。さらに、フリーダの果たす役割は *The Ambassadors* のストレザーに引き継がれてもいるとも言える。あえて言及するならば、数多くの試みが一つの作品の中でなされているために、構成と統一感において後期の三作品を超えることはない。その意味で、*The Spoils of Poynton* は新たなる飛躍の前の暗中模索に時期に書かれた実験的作品にも思える。

しかし、世紀末の退廃的な風潮の中で不遇な時代を送り、劇作での失敗を乗り越えて覚醒したジェイムズが、この作品で自由の精神と道徳的判断に従って生きるというテーマに立ち返り、再び小説の創作を再開したことは、ジェイムズ文学におけるこの作品の重要性を物語っている。そして、これまでの考察から明らかなことは、この小説におけるフリーダの新たなる門出が、ジェイムズの再生をも示唆しているということである。

注

本稿における *The Spoils of Poynton* からの引用はすべて *The Spoils of Poynton. The Novel and Tales of Henry James*. New York Edition. Vol. X. Tokyo: Hon-No-Tomosha, 1997. Rpt. of *The Spoils of Poynton*. New York: Charles Scribner's Sons, 1908 により、本文中には頁数のみを記すこととする。

1. Henry James, *The Complete Notebooks of Henry James*, 79.
2. Henry James, *The Complete Notebooks of Henry James*, 131.
3. Charles G. Hoffmann, *The Short Novels of Henry James*, 55-70; Arthur Hobson Quinn, *American Fiction*, 295.
4. Yvor Winters, "Maule's Well," *In Defense of Reason*, 319.
5. Henry James, *The Notebooks of Henry James*, ed. F. O. Matthiessen and Kenneth B. Murdock, p.138; Charles G. Hoffmann, *The Short Novels of Henry James*, 55-70.
6. 富士川義之『ある唯美主義者の肖像—ウォルター・ペーターの世界—』191 頁
7. Walter Pater, *Appreciation: with an Essay on Style*, 253.
8. Henry James, "The Art of Fiction," *Partial Portraits*, 388.
9. Tony Tanner, *The Writer and His Work: Henry James*, 72-73.
10. Henry James, *The Library of Henry James*, 52.
11. Jonathan Freedman, *Professions of Taste: Henry James, British Aestheticism, and Commodity Culture*, 105-108.
12. Henry James, *Letters*, Vol. I, 93-94.
13. Jonathan Freedman, *Professions of Taste, Henry James, British Aestheticism, and Commodity Culture*, 102.
14. Oscar Wilde, *The Annotated Oscar Wilde: Poems, Fiction, Plays, Lectures, Essays, and Letters*, 371.
15. Oscar Wilde, *The Letters of Oscar Wilde*, 151-155.
16. Adeline R. Tintner, with a foreward by Leon Edel, *The Book World of Henry James: Apporopriating the Classies*, 225.
17. Adeline R. Tintner, with a foreward by Leon Edel, *The Book World of Henry James: Apporopriating the Classies*, 225-230.
18. David Lodge, "Art of Ambiguity: *The Spoils of Poynton*," *After Bakhtin: Essays on Fiction and Criticism*, 139-142.
19. Edwin T. Bowden, *The Themes of Henry James*, 75.
20. Henry James, *The Complete Notebooks of Henry James*, 134.
21. Henry James, *The Art of the Novel*, 131.
22. Henry James, *The Art of the Novel*, 129.
23. Charles G. Hoffmann, *The Short Novels of Henry James*, 63.
24. Henry James, *The Letter of Henry James*, Vol. II, 245.
25. Henry James, *The Art of the Novel*, 126.
26. Henry James, *The Art of the Novel*, 130.
27. Henry James, *Letters*, Vol. III, 300.
28. Henry James, *Letters*, Vol. III, 516.

29. Leon Edel, *Henry James: A Life*, 451-452.
30. Henry James, *The Complete Notebooks of Henry James*, 121.
31. Henry James, *Letters*, Vol. VI, 9-10.
32. Henry James, *Letters*, Vol. III, 514.
33. Adeline R. Tintner, *The Book World of Henry James: Appropriating the Classics*, 277-291.
34. Yvor Winters, *In Deference of Reason*, 300-343.
35. F. O. Matthiessen, *The Major Phase*, 26.
36. Henry James, *Letters*, Vol. I, 77.
37. Henry James, *Letters*, Vol. VI, 250-251.
38. Henry James, *The Complete Notebooks of Henry James*, 109.

参考文献

- Anderson, Quentin. *The American Henry James*. New Brunswick: Rutgers UP, 1957.
- Bowden, Edwin T. *The Themes of Henry James*. New Haven: Yale UP, 1956.
- Edel, Leon. *Henry James: A Life*. New York: Harper & Row, 1985.
- Fletcher, Ian. *Walter Pater*. Essex: Longmans, 1971.
- Freedman, Jonathan. *Professions of Taste; Henry James, British Aestheticism, and Commodity Culture*. California: Stanford UP, 1990.
- Gale, Robert L. *A Henry James Encyclopedia*. New York: Greenwood Press, 1989.
- Hoffmann, Charles G. *The Short Novels of Henry James*. New York: Bookman Associates, 1957.
- James, Henry. *The Ambassadors. The Novel and Tales of Henry James*. New York Edition. Vol. XXI, XXII. Tokyo: Hon-No-Tomosha, 1997. Rpt. of *The Ambassadors*. New York: Charles Scribner's Sons, 1909.
- , "The Art of Fiction," *Partial Portraits*, 1888. Ed. Leon Edel. Michigan: The University of Michigan Press, 1970. 375-408.
- , *The Art of the Novel*. Ed. Richard P. Blackmur. New York: Charles Scribner's Sons, 1934.
- , *The Complete Notebooks of Henry James*. Ed. Leon Edel and Lyall H. Powers. New York: Oxford University Press, 1987.
- , *The Golden Bowl. The Novel and Tales of Henry James*. New York Edition. Vol. XXIII, XXIV. Tokyo: Hon-No-Tomosha, 1997. Rpt. of *The Golden Bowl*. New York: Charles Scribner's Sons, 1909.
- , *Henry James: Autobiography*. Edited with an introduction by Fredrick W. Dupee. London: W. H. Allen, 1956.
- , *Letters*. Ed. Leon Edel. 4 vols. Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press, 1974-1984.
- , *The Letter of Henry James*. Ed. Percy Lubbock. Vol. II. New York: Octagon Books, 1970.
- , *The Library of Henry James*. Compiled and edited with essay by Leon Edel

- and Adeline R. Tintner. Ann Arbor: UMI Research Press, 1987.
-, *The Notebooks of the Henry James*. Ed. F. O. Matthiessen and Kenneth B. Murdock. New York: Oxford University Press, 1961.
-, *The Portrait of the Lady. The Novel and Tales of Henry James*. New York: Edition. Vol. III, IV. Tokyo: Hon-No-Tomosha, 1997. Rpt. of *The Portrait of the Lady*. New York: Charles Scribner's Sons, 1908.
-, *The Spoils of Poynton. The Novel and Tales of Henry James*. New York Edition. Vol. X. Tokyo: Hon-No-Tomosha, 1997. Rpt. of *The Spoils of Poynton*. New York: Charles Scribner's Sons, 1908
-, *The Wings of the Dove. The Novel and Tales of Henry James*. New York Edition. Vol. XIX, XX. Tokyo: Hon-No-Tomosha, 1997. Rpt. of *The Wings of the Dove*. New York: Charles Scribner's Sons, 1909.
- Lodge, David. "The Art of Ambiguity: *The Spoils of Poynton*," *After Bakhtin: Essays on Fiction and Criticism*. London: Routledge, 1990. 129-142.
- Matthiessen, F. O. *Henry James: The Major Phase*. New York: Oxford UP, 1946.
- Pater, Walter. *Appreciation: with an Essay on Style*. London: Macmillan, 1890.
-, *The Renaissance: Studies in Art and Poetry*. Edited with Introduction and Note by Adam Phillips. New York: Oxford University Press, 1998.
- Quinn, Arthur Hobson. *American Fiction: An Historical and Critical Survey*. New York: D. Appleton-Century, 1936.
- Tanner, Tony. *The Writer and His Work: Henry James*. Amherst: The University of Massachusetts Press, 1985.
- Tintner, Adeline R. *The Book World of Henry James: Appropriating the Classics*. With a Forward by Leon Edel. Ann Arbor: UMI Research Press, 1987.
- Wilde, Oscar. *The Annotated Oscar Wilde: Poems, Fiction, Plays, Lectures, Essays, and Letters*. Edited, with introductions and notes, by H. Montgomery Hyde. New York: Clarkson N. Potter, 1982.
-, *The Letters of Oscar Wilde*. Ed. Rupert Hart-Davis. London: Rupert Hart-Davis, 1962.
- Winters, Yvor. "Maul's Well," *In Defense of Reason*. 3rd. ed. Denver: Alan Swallow, 1947. 300-343.
- 市川美香子『ヘンリー・ジェームズの語りー 一人称の語りを中心に』 大阪: 大阪教育図書 2003年
- 高橋裕子『イギリス美術』 東京: 岩波書店 1998年
- 武田千枝子「*The Spoils of Poynton* - Fleda Vetch の再生」『学習院大学文学部 研究年報 16』 東京: 学習院大学文学部 1971年
- 富土川義之『ある唯美主義者の肖像ーウォルター・ペーターの世界ー』 東京: 青土社 1992年
- 別所恵子・里見繁美編著『ヘンリー・ジェームズと華麗な仲間たちージェームズの創作世界ー』 東京: 英宝社 2004年